

中国サマーセミナーの成果と可能性についての一考察

—2010年度 新潟大学清華大学サマーセミナー アンケート調査 報告書—

A Study on the Summer Seminar in China :
A Survey Report of the Summer Seminar 2010
at Tsinghua University by ISC, Niigata University

干野 真一*¹・真水 康樹*²・藤田 益子*³

2011年7月30日至8月29日、新潟大学学生进行了清华大学短期研修。本稿以过去的问卷调查为根据，对这次研修的问卷调查进行了整理总结。

这个研修始于1994年清华大学人文社会科学学院和新潟大学法学部之间的新潟大学夏季短期班。之后的2006年，变成新潟大学国际中心赞助举办，2010年开始，成为清华大学和新潟大学共同举办的项目。清华大学和新潟大学的这个活动到现在已经是第17次了。1994年到现在，参加这个项目的学生已经达到310人。这期间没有发生过任何事故。

目次

はじめに

第1部 事前アンケート

第2部 事後アンケート

第3部 追跡アンケート

むすびにかえて

はじめに

2010年7月30日から8月29日まで、新潟大学の学生を対象とした清華大学サマーセミナー（以下、「サマセミ」と略称する場合もある。）が実施された。本稿は今回のサマーセミナー参加学生へのアンケートをまとめ、過去に実施されたアンケート結果^(註1)も踏まえて、考察したものである。

*¹ 新潟大学 教育・学生支援機構

*² 新潟大学 法学部

*³ 新潟大学 国際センター

本セミナーは、1994年に清華大学・人文社会科学学院と新潟大学・法学部との間で新潟大学サマースクールとして始められ、その後、2006年から新潟大学・国際センターが協賛する形となり、2010年からは清華大学・新潟大学の共催のプログラムとなっている。よって、清華大学・新潟大学間の本プログラムは、今回で通算17回目の実施である。1994年以來の参加者の累計は、310人に達し、この間、事故等は一度も生じていない。

まず、この清華大学サマーセミナーの特徴を学習面に限って挙げると次の通りである。

- (1) 1日6時間、全期間合計で90時間の授業時間
- (2) やる気のある者だけのクラス
- (3) 課外時間の有効活用：日本語禁止

中国での夏期集中コースは、民間のものも含めて数多いが、この3条件を満たすものはおそらく全世界でこの清華大学サマーセミナーだけである。本セミナーの上記(1)、(2)のメニューは、徹底して学習の効率性を重視したものである。毎日6時間の授業時間を設定しているサマーセミナーは、中国側の担当者も「中国国内では他に例がない」と言い切る。その6時間が、やる気のある学生だけで構成されているのだから、その相乗効果は言わずもがなであろう。この毎日6時間のメニューは第1回からずっと変わらない。そして(3)のメニューもあくまで学習効果を考へてのことである。サマーセミナーでは、食事の時間も含めて、廊下等、自室以外の全ての場所で、「日本語禁止」を徹底している。このため、全員が必ず揃う昼食と夕食のテーブルは、授業プラス・アルファの勉強時間となる。ある程度基礎力のある学生なら、限られた語彙のなかでも、かなりの幅の表現を行えるし、場を与えられることで応用力もつく。食事の各テーブルには、必ず上級者が配置されているので、適切なアドヴァイスも得られる。初心者は初心者で、ヒアリングのトレーニングになるし、語彙も増える。そして、一言も喋れなかった、聞かれていることはわかったのに答えられなかった悔しさは、さらにいっそうの学習意欲を育てることになるのである。

その教育効果は絶大であり、2011年2月の時点で、1994年以來の北京大学への派遣留学生77名のうち70名(90.9%)、1996年以來の清華大学への派遣留学生35名中の25名(71.4%)が、このサマーセミナーの経験者であることから、十分に理解されよう。

サマーセミナーでは本年度から新事業を幾つかスタートさせることになった。ここでは特に4点のみ挙げるに留める。1、初めて、中国語ゼロビギナーの参加を認めた。2、学術講座と題して中国伝統文化を聞いて学ぶ時間を設けた。3、本学特任准教授である王星宇先生の紹介で、在京の中国人学生との「交流」の場を設けた。4、今回は、職員研修の対象となり、事務官1名が1週間参加した。清華大学サマーセミナーに関しては、2010年度に学生からの体験記や、参加人数の変遷、さらには卒業生列伝なども含めた報告書が関係者によって作成される事となっているので、本年度からの新事業の詳細等も併せてそちらをご参照いただきたい。^(注2) その報告書冊子に収録されている学生の体験記が、最も主観的な実績を示す部分であり、また、サマセミ参加人数や長期留学へ進んだ学生数の変遷などが客観的な実績を証明するものであるならば、本稿に見るアンケートはその中間的な性格を持つものであ

る。なぜなら、アンケートは参加した全学生へ統一した質問をする点で客観的指標を基準とするが、一方でその回答は多岐に渡っており主観的な要素を色濃く反映したものとなっているからである。択一式の調査形式のみならず自由記述の項目も多いため、統計処理に馴染まない点もあるものの、総じて、アンケート結果は「学生の満足度」を数値化したものと言えるだろう。

次に、サマーセミナーで実施されているアンケートの概略を紹介する。サマーセミナーでは毎回、学生に対して3種類のアンケートを実施している。内訳は、参加決定時点（事前）、終了後（事後）、約3ヵ月後（追跡）の3種である。アンケートの質問項目は、開始から一貫して同じ内容で実施されてきたため、経年変化による分析が可能である。それは全く、初回実施時における長期的な視野に立った創意に因るものである。そこで今回は、2010年度のアンケートのまとめを主眼に置きつつも、2000年度および2006年度に実施されたアンケートの結果をも部分的に参照して考察を試みる。

以下、参照する過去年度のデータに関連して、当時の状況を簡単に紹介しておく。2000年度は、当時、法学部独自のプログラムとして「サマースクール」という名称で実施されていた時期であり、サマセミ通算では7回目のものである。記録によると、7回目の当時に参加人数が過去最高の27名となり、延べ人数が150人を超えたとある。

2006年度は、「サマーセミナー」となってから3年目、新潟大学・国際センターの「協賛」が始まった年であり、講義内容、成績評価の面に限った協力が始まった。サマセミ通算では13回目にあたり、累計の参加者は249名に達したとある。補足ながら、本年度（2010年度）から本プログラムが「清華大学・新潟大学共催」となったことを踏まえると、今回比較する3つの時期はそれぞれの運営形態が異なるという点も特筆されよう。

本稿で用いるデータの属性は次の通りである。

- 2000年度——24名分。（所属は全て法学部生。学年別では、1年生7名、2年生11名、3年生5名、4年生1名。男女比については不詳。）^(注3)
- 2006年度——16名分。（所属別では、法学部10名、人文学部3名、農学部2名、工学部1名。学年別に見ると、1年生9名、2年生5名、3年生1名、4年生1名。男女比は女子10名、男子6名である。）
- 2010年度——25名分。（所属別では、自然研1名、法学部13名、教育学部3名、人文学部2名、農学部2名、経済学部1名、工学部1名、歯学部1名、理学部1名。学年別では、1年生11名、2年生6名、3年生5名、4年生2名、大学院1名。男女比は女子13名、男子12名である。）

以下、第1部としてまとめたものは、サマーセミナー出発前に実施した「事前アンケート」の結果であり、第2部は、9月の帰国後に実施した「事後アンケート」の結果である。さらに、第3部の内容をなす「追跡アンケート」は12月に行われた。なお、引用コメントに付した「(M)」は男子学生からのコメントを、「(F)」は女子学生からのコメントであることを表す。

第1部 事前アンケート（全13項目）

Q1. サマーセミナーの存在をいつ知りましたか？

1、入学前 2、入学後

Q2. サマーセミナーの存在をどうして知りましたか？

(2010年度)「入学前」と答えた者9名、「入学後」と答えた者16名。前者の9人のうち8名が1年生であり、入学手続きの資料に入っていたパンフレットから情報を得る場合がほとんどのようである。後者については2年生以上が中心となるが、入学直後の時点でその存在を知っていた者は多く、今回、機が熟しての参加となったと思われる。

(変遷) 3つの時期の変遷を見ると、次の通りである。

年度 \ 時期	入学前	入学後
2000	17 (71%)	7 (29%)
2006	7 (44%)	9 (56%)
2010	9 (36%)	16 (64%)

傾向としては、入学前よりも入学後に情報を得る学生が多くなってきた、となるが、「入学後」の具体的な時期としては4月～5月に集中しており、入学前および年度初めから初夏にかけて効率よく広報活動が行われていることを裏付けることとなった。

Q3. サマーセミナーに行く決意をしたのはいつですか？

(2010年度)「入学前」に決めていたのは2名のみであった。それ以外の時期は多様であるが、4月末の1回目の説明会がきっかけとなって、5月頃に決心した者が多いようである。なかには「去年の5月」、「昨年の事前説明会に行ったあと。」という者もあり、サマセミにかける意気込みの程がうかがえる。

(変遷) 2000年度、2006年度を振り返っても、概ね、説明会と中国語の授業が動機となっており、時期的には5月から6月を挙げる者が多い。

Q4. サマーセミナーに行くのは何回目ですか？中国以外も含めて、教えてください。

(2010年度) ほぼ全員の24名が初参加。2度目の者が1名だった。

(変遷) 2000年度は法学部のプログラムであったため、イギリスやカナダへのサマーセミナーに参加したことがある学生もいたようである。2006年度は、16人中、14名が初参加。2度目が1名、無回答が1名だった。

Q5. サマーセミナーに何を一番期待していますか？

(2010年度)「中国語力の向上」を挙げた者が25名中23名、「コミュニケーション」を挙げた者が7名いた。複数回答のため、合計は母数を上回る。各人、様々な方面への期待があるよ

うである。個別回答例は次の通り。「中国の姿を自分の目でみたい」、「新たな視点を中国語を通して身につける」、「自分を変える」、「自分の海外におけるの適応力（の向上）」、「対中国、諸外国といった海外に対する考え方（の涵養）」、「中国文化を知る、対日感情。対日本人感情」、「文化体験」。いずれも「語学力の向上」という大目標を達成するに当たっては不可欠なものばかりである。

（変遷）過去を振り返っても、ほぼ同様の結果である。プログラムの趣旨を参加者が理解し、さすがに目的意識が明確な印象である。

Q 6. 勉強面で不安はありますか？それはどんな不安ですか？

（2010年度）語学学習をみっちりやるプログラムであることを事前に了解して参加希望した学生たちではあるが、勉強面での不安は大きいようである。「ネイティブ教員との会話・授業についていけるか」と答えた者が17名。無回答や「不安無し」と答えたのは5名であった。その他には「みんなについていけるか。」、「音が聞きとることが苦手なこと」、「学力が足りていないこと」があった。表現はそれぞれだが、ネイティブ教員とのコミュニケーション、主に聞くことに対する苦手意識が多くみられた。

（変遷）2000年度は講義についての不安が、24名中21名。同じく2006年度は16名中14名。「不安なし」と答えた者の人数から見ても、2010年度は例年に比べて“胆子大”な学生が集ったのかも知れない。

Q 7. 勉強以外の面で不安はありますか？それはどんな不安ですか？

（2010年度）一番多かったのは「健康・体調」に関する不安で8名がこれに回答した。以下、なし・無回答が5名、衛生面が4名、中国語での生活4名、食事3名、買い物2名、集団生活1名だった。

（変遷）「健康、食べ物、生活習慣」を筆頭に、上記の内容は参加学生が常に抱えている不安のようである。

Q 8. 日本語禁止の方針についてどう思いますか？疑問や反対意見もドンドン書いて下さい。

（2010年度）回答は大まかに見て、「すごく良い・良い」、「不安だが良い」、「良いが不安」、「不安・不安視」の4タイプに分かれた。「良い」と回答した者は11名、「不安だが良い」と前向きな回答は5名、「良いが不安」と答えた者が5名、「不安」が3名、「特になし」が1名だった。学年別による傾向として「良い」と回答した者は2年生以上に多く、「良い／不安」と答えたのは1年生に多かった。具体的な記述内容の例は次の通り。

「良い」……「賛成（全面的に）」（M）、「無理やりにでも日本語を使わない環境を作るのはとても良いと思います。」（M）、「強制的に中国語を学ぶ機会をえることができるため良いと思う。」（M）、「すごく良いと思う。生きるために必要だから。」（M）、「友達と会話をしたいという気持ちが強いので、自分がしゃべりたい単語などを積極的に調べるので賛成です。」

(F)

「不安だが良い」……「中国語を始めたばかりの人にはかなりきつと思います、日本語禁止を体験するのも興味深い」(M)、「日本語禁止については、多くの不安を生みますが、自分のためにがんばります。」(F)、「本当はとても不安ですが、私はこのような手段をとってもらわないと中国語を覚え、日本語に甘えてしまうでしょう。」(F)、「こうでもしないとなかなか話せるようにならないと思うのでいいと思う。多少不安ではあるけど。」(F)

「良いが不安」……「良いことだと思うが、今とても不安である。」(F)、「いいと思います。でも上(Q7)のような不安は大きいです」(F)、「いいとは思いますがすごく不安です。最初の何日かは大丈夫なのがよかったです。」(F)

「不安」……「不安です。」(F)、「基礎・初級クラスの人々にとってきついのではないか。」(M)、「意志が弱くて自信がないです」(F)

「良い」と答えた者には男子学生が多く、「不安」と答えた者には女子学生が多かった。

(変遷) 清華大学サマーセミナー創設以来の「伝統」である。当然、この点は「織り込み済み」で申し込んできており、肯定派が多い。

Q9. 日本語禁止も含めて、部屋でもできるだけ中国語を使うよう心がける等、自分で中国語を身につける環境を意識的に維持できると思いますか？

(2010年度) 「できる・頑張る・努力する」と答えた者は24名。1名が「意志が弱くて自身がないです」と回答した。また、「できる」と答えた上で、「ただ、中国語を勉強するにあたり、日本語でのコミュニケーションをとれるように、授業後の何時間かは日本語で話せる時間が欲しい。」という声も見られた。

(変遷) 前項目にも関連して、「覚悟」はできているという者が多く、ほとんどが肯定的見解である。

Q10. サマーセミナーの参加費は誰が負担しますか？あるいは負担割合はどの程度ですか？

(2010年度) 親や親族が100%負担する者は14名、両方が負担するが親の割合が多い者が2名、同じく自分の割合が多い者が2名、自分が100%負担する者は7名であった。この7名のうち4名については、現在は親から「借金」をしているが将来返還予定とのことである。

(変遷) 2000年度は、全額保護者14名、全額自己負担7名、分担3名。2006年度は全額保護者が10名、全額自己負担は2名、将来の返還が2名、半々の分担が2名。

本年度も含め、全額保護者負担というのが最多である。2000年、2006年の報告にもあるが、「ただし、主観的に言えば、自己負担であるか否かと、やる気の間には相関関係はないように思われる。」(2006年度の報告より) 本年度も然り。

Q11. サマーセミナーに参加することについて保護者は好意的でしたか？それとも、説得するのに手間取りましたか？反対されたとしたら、それはどのような理由でしたか？

(2010年度) 好意的でなかったと回答したのは5名いた。その理由としては「中国は危険だから」が2名、「行ってどうするの??」、就職活動への影響、金銭面がそれぞれ1名ずつであった。また、「父は好意的だったが、母は治安等を理由に反対」(M)というものや、「参加自体は賛成だったが金銭面でなかなかOKがでなかった」(F)という回答があった。以上を除く、18名については好意的な理解やあっさりとした了承が得られたようである。「好意的であった。全く、否定的ではなかった。」(M)、「中国語の重要性は日に日に高まってきているのでとても好意的だった。」(F)など。さらに、「好意的、とまではいかないまでもあっさりOKしてくれた。勉強のためなら、お前が行きたいのなら、ということだった。」(F)や、「そんなに好意的というわけでもなかったけど、すぐに行ってもよいと言われました。」(F)という回答からは、大学のプログラムに対する保護者からの信頼が読みとれるように思う。(変遷) 過去の報告を見ても、理由、傾向とも本年度と類似した結果が見られる。

Q12. 計4回、説明会をりましたが説明のしかたはどうでしたか？不十分なところや説明の足りなかったところがあったら教えてください。

(2010年度) 複数回答であるが、多くの回答が「十分だ」という好意的なものであった。「よくわかりました」(F)、「わかりやすいし、具体的に想像しやすかった。質問しやすい雰囲気よかった」(F)、「最後に動画を見せてもらったのが良かったです」(F)、「とてもわかりやすい説明で、説明会のおかげで疑問点も解消された」(F)、「説明会に参加し、より行きたいと思ったので、いいと思います」(F)。現地での授業の様子、中国語の学習方法、過去参加者の体験談が知りたかった者も3名おり、また、「重要なことだし人数も多く仕方がない」と理解はしつつも「長かった」との回答も3名見られた。無回答は4名であった。

(変遷) 基本的に不満の回答はない。2000年度の回答には「ルール集の配布が遅かったこと」、2006年度には「もっと説明会を開くべき」というのがあるが、本年度には同様の回答が見られないことから、本プログラムがノウハウを蓄積し、適切な説明会を実施していることが分かる。

Q13. その他、何か書きたいこと＝言いたいことがあったらどうぞ！！

(2010年度) 記述があったもののうち、大半が「がんばります」という類の決意コメントであったが、自由コメントということで、「天津など旅行には都会に行きたかった」(M)、「費用がもっと安いとうれしいです」(F)、「海外旅行が初めてだったので、換金や、搭乗手続きなども、多少の知識を資料等で見せて頂ければよかった」(M)といったものも見られた。その中で「見学等に行くまで、補足的な説明をしてくれたら嬉しい」(M)というリクエストについては、実際に参観地点への移動中の車中などで、引率教員から意識して解説が実施され

た。

(変遷)「もっと安ければ更によかったです」という回答は2006年度にも見られる。

第2部 事後アンケート (全13項目)

Q1. サマーセミナーの全般的な感想はどうですか？

1、満足 2、まあ満足 3、やや失望 4、失望

(2010年度) 参加した25人のうち、22名が満足と回答。3名は「まあ満足」と答えた。なお、「まあ満足」と答えた者のうち1名は「風邪をひいて、講義を休んでしまった」(F)とのこと。

(変遷) 2000年度:「満足」17名、「まあ満足」6名、「やや失望」1名(自分自身に対するもの)。2006年度:「満足」12名、「まあ満足」4名。

過去と比べても本年度、「満足」と回答した割合が高いことが明らかである。教員側の実感が学生側の回答により裏付けられた。

Q1'. その理由は何ですか？

(2010年度) 当然ながら、サマーセミナーで学生がどのように感じたかは個人により異なり、全て等価に有意義なものである。そこで、ここでは一つ一つを紹介する。以下は、「満足」と回答した21名の理由である。1名は記述なしだった。

- ・「中国語が上達したし、中国人の発音をたくさん聞くことができたから」(M)
- ・「授業から日常生活、小旅行にいたるまで全て注意が払われていて安心してすごせた」(M)
- ・「中国語を話す力が少しついたことと、人と積極的に話す機会がもてたこと」(M)
- ・「特に不満だと思えるところもなく、楽しかったからです」(M)
- ・「無駄にダラダラ過ごしていたであろう夏休みを充実したものにできたから」(M)
- ・「中国語だけでなく、歴史的な名所も一通り行けたから」(M)
- ・「実際に中国に行けたこと。中国本場の言語・文化に触れられたこと」(F)
- ・「先生方や、一緒に行ったメンバーがとても良かったからです。そして、貴重な場所を見学できたことと、ほとんど中国語で行われる授業を受けられたからです」(F)
- ・「語学だけでなく、様々な体験をすることができたから」(F)
- ・「中国語の授業は、最初は全然わからなくて辛かったけど、段々聞きとれる単語が増えてきて、成長しているような気がしました。あと、いろんなところに連れていってもらって、詳しい説明もしっかりしてもらえてよかったです」(F)
- ・「1ヵ月現地で中国語を学んだことにより、実践的な言語を身につけることが出来た。言語だけでなく、中国という国自体に大きな関心を覚えた」(M)
- ・「日本で知る事のできないような中国の良い所と悪い所を体験として知る事ができました。中国語に関する興味も増しました」(F)

- ・「得られたもの、まだ足りないものというのが明確になったから」(F)
- ・「中国語の勉強だけでなく、様々な街の様子を見ることができたり、現地の方とも交流できたこと」(F)
- ・「中国語の勉強に集中することが出来たから」(M)
- ・「色々な土地に訪れ、現地の学生とふれ合う機会もあり、自分の視野が広がったように思うから」(F)
- ・「凄く充実していました！勉強面も友達も凄く楽しかったです！」(F)
- ・「中国語の力を伸ばすことができ、多くの仲間に出会うことができたから」(F)
- ・「得られるものが多かったから」(M)
- ・「中国語のスキルアップはもちろん、参観活動、他大との交流などどれもが貴重な経験でした」(F)
- ・「追い込まれた状況で語学力を向上できたこと。北京だけではない様々な中国を見ることができたこと」(M)

続いて、「まあ満足」と回答した3名の回答である。

- ・「真剣に中国語が勉強できたため」(F)
- ・「メンバーも個性的な人たちで、中国文化、中国語以外にも獲得したものがたくさんあったこと。「まあ満足」なのは風邪を引いて、講義を休んでしまったこと」(F)
- ・「これまでにない経験ができたから」(M)

総じて、中国語の学習に集中できたことを理由に挙げた者が17名おり、極めて高い満足度を示していると言える。

(変遷) 過去の「理由」も、表現は違えど、本年度とほぼ同様の回答である。

Q 2. サマーセミナーで何が一番充実していましたか？

(2010年度)「一番」との但し書きがあるにもかかわらず、複数回答が多かった。一つに絞りきれないという心情の表れと判断する。回答の多かったものから順に、「授業」13名、「参観」8名、「自由行動」4名、「小旅行」3名、「食事（食事の中の中国語会話）」2名、「交流」2名、「仲間」1名という結果となった。

(変遷) 過去のデータでも「授業」という回答が最も高い。

この支持にサマーセミナーの魅力が集約されていると言っても過言ではない。

Q 3. 何が一番の収穫でしたか？(Q 2と同じでも構いません)

サマーセミナーで得られた収穫は学生により異なるようである。サマーセミナーの成果を振り返る上で重要な感想であると判断されるので、以下に全文を掲載する。

- ・「中国人の会話から、ネイティブの人の話し方を学ぶことができた」(M)
- ・「中国語での日常会話ができただこと」(M)
- ・「勉強に対する姿勢と話す力」(M)
- ・「中国の人と交流したとき、最も興味があった天安門事件の話を聞いたこと。あとは英語

- の必要性を痛感したことです」(M)
- ・「先輩と、それも色々な学部・学年の人たちと話すことができたこと」(M)
 - ・「人民大学との交流」(M)
 - ・「値引きができるようになったこと」(F)
 - ・「中国の経済発展を間近で見れたこと」(F)
 - ・「中国人が話す中国語の中で生活できたこと。話せるようになりたいと強く思うようになりました。また、中国についてもっとよく知りたいと思うようになったことです」(F)
 - ・「実際に中国に行ったという自信」(F)
 - ・「長期留学を意識していたので、中国の雰囲気を感じられたのがよかったかなーと思います」(F)
 - ・「中国の先生による授業の中で、ちゃんと文法の説明や、話していることが聞きとれたことです」(M)
 - ・「語学。世界観が広がった」(M)
 - ・「中国を見る目が変わりました。良い所と悪い所の両方を自分の体験として得られた事が何よりの収穫です」(F)
 - ・「現地の人と話す機会があったこと」(F)
 - ・「教科書の文を勉強するだけでなく、中国語で四合院などの話を聞いたこと」(F)
 - ・「中国に対しての関心、勉強に対しての意識の違い、交流を通して、今後の大学生活の過ごし方を考えるようになった点、留学生としての生活など様々。」(F)
 - ・「中国に長期間行けたこと」(M)
 - ・「中国の現状を直接自分の肌で感じる事ができたこと」(M)
 - ・「海外という土地で1人(or 少人数)で行動してみる事へのチャレンジ精神を手に入れたこと」(F)
 - ・「中国語尽くしという環境」(F)
 - ・「今の中国の様子を様々な場所を見ていく中で感じる事ができて良かった」(F)
 - ・「抗日戦争記念館での、中国人の歴史観・認識を知ることができたこと。日本がしてきたことを知れたこと」(M)
 - ・「中国語のレベルが上がったと自分で実感できたこと」(F)
 - ・「中国語を勉強する習慣などを拘束力のある環境の中で実践できたこと」(M)

Q 4. 何か嫌なことはありましたか？ 差し支えなければ教えてくださいか？

(2010年度)「特になし」と無回答が約半数。「嫌なこと」として書かれた内容を整理すると、住環境(特にシャワー、トイレなど水回り)、食事(油っこい料理に慣れない)、仲間(団体行動に協力的でない人、皆のやる気を失わせる態度をとる人がいた)というものが見られた。さらに、本プログラム自体についての記述があったが、引用すると「最初は日本語禁止が嫌ではなかったが、あれがあったからこそ、充実したんだと思いました。最後の方は、全然まだまだですが、聞きとれる言葉は増えて楽しかったです」(F)とあり、自己

解決したようである。さらに、「レベルの差のばらつき」というコメントも見られ、今回は3クラスに分けたが、クラス内部でも差があったのだろうと推測される。

(変遷) 2000年度、2006年度のデータには、「住環境」に対する不満を書いたものは見られなかった。報告者が思うに、宿舎の環境が日本のそれに近づいたことによって、無意識に「日本の常識」を適用しており、そうして生まれた「不満」ではないだろうか。

Q 5. あなたが期待したものは得られましたか？それは何故ですか？

(2010年度) 10名が中国語に関して期待していたものが得られたと回答した。その他、現地での体験から得るものが多かったようである。以下、数名の回答を特に抜粋する。いずれも、今後の更なる飛躍が楽しみなコメントばかりである。

- ・「中国語が中国語にきこえるようになったかも。毎日その言葉に触れていたから」(M)
- ・「50%得られました。今回のセミナーでは、何かを得た、というよりも、自分に足りないものを知る事ができた、という気持ちです」(F)
- ・「視野が広がることを期待して行きました。そして広がりました。一番大きいのは外国語に対するモチベーションを得たことです」(M)
- ・「得られた。自分が知らないことを、肌で目で耳で鼻で知ることができたこと。そして、語学に対する興味が更に湧いた」(M)
- ・「中国語を勉強する上での第一歩を踏み出すことができたため、自分の期待したものを得ることができた」(M)

(変遷) 中国語の学習効果を挙げたのは、2000年度は24名中14名。2006年度は16人中9名。

本年度が25名中10名であることを考えると「低下」したように見えるが、上述の通り、プログラムへの「満足」は高く、「授業」に対する支持も顕在である。2006年度の報告にある「サマーセミナーの達成感の大きな部分は、要するに語学力の進歩の度合いに由来する」ことはこれまでもこれからも変わらないだろう。本年度のデータからは「期待すること」に多様性が見られたという解釈も可能である。これは今後の動向に注目したい。

Q 6. 何が期待通りではありませんでしたか？それは何故ですか？

(2010年度) 「特になし」や無回答だったものが9名。記述のあったものは、今後の運営におけるヒントとなるため、全て列挙することとしたい。

まず、中国語学習に関するもの。

- ・「思ったより授業時間が少なかった」(M)
- ・「現地の中国人と話すことがあまりなかった。どうしてもサマセミ参加者と話すことが圧倒的に多かった」(M)
- ・「もっと先生に質問するとか、自分から中国語を使うようにしていれば、もっと成長できたのかなーと思いました。自分の責任なんですけど……。听力が最後まで全然できなかったなーとへこんでおります」(F)
- ・「日本語禁止は私自身もっとシビアにすべきだったと思うし、もっと厳しく徹底したもの

でも良かったと思います」(F)

- ・「他のセミナー生がよく日本語を使用していたことです」(M)
- ・「高級クラスのレベルが想像していた以上に高かったこと」(F)
- ・「リスニング、スピーキング両方がすごく成長できると思っていた点、自己の今後について考えるきっかけにしようとした点など、かいかぶりすぎていたため、期待通りではなかった。(期待が大きすぎたため)」(F)
- ・「もう少し厳しい環境下に置かれたならば、もっと多くのことを得られたかな、と思います。それと、中国人との交流をもっとしたかったです」(M)
- ・「授業が2科目しかなかったので、もう1科目何か他の科目があったらより多くのことを吸収できたのかもと思います」(F)

次に、参観などについて。

- ・「1ヶ月では少し短くて観光が不十分だった」(M)
- ・「観光名所ばかりではなく、中国に進出している日本企業などに行き、内部で働いている人などと話してみたかった」(F)

さらに、日々の生活面。

- ・「日々のスケジュールの過密さ」(F)
- ・「寮の宿舎。期待を良い方に裏切ってくれたと思う。良い環境で、学習できたことに感謝したい。」(M)

最後に食事に関して。

- ・「学食がbuffet方式だと勝手に思っていたので」(F)
- ・「ピーマンだと期待して食べたものが大きい唐辛子で泣きました。それ以外は全て期待通りどころか期待以上でした」(F)
- ・「食事。なかなか味になれることができなかったため」(M)

Q 7. 期待通りの中国語力がつきましたか？

1、進歩した 2、まあ進歩した 3、あまり進歩なし 4、全然進歩なし

(2010年度)「進歩した」と回答した者が9名。「まあ進歩した」と回答した者が16名。その16名には、謙遜による者、冷静な感想の者、若干の失望まじりの者などが考えられる。

(変遷) 2000年度、「進歩した」は7名、「まあ進歩した」は14名、「あまり進歩なし」が3名。2006年度、「進歩した」は3名、「まあ進歩した」は11名、「あまり進歩なし」が2名。

2010年度が「進歩した」、「まあ進歩した」のみであることは、特筆に値する。また、次項で見るように、「進歩した」と答えた者に、いわゆる「ゼロビギナー」が多いことは留意を要する。“ゼロ”即ち「無」から「有」への変化が実感しやすいことは言うまでもないからである。

Q7'. もう少し詳しく教えてください。

(2010年度) 本項目への回答は、サマーセミナーの主眼である語学習得に関する達成程度を如実に示すものであるため、それぞれで異なる回答を列挙する。

先ず「進歩した」と回答した9名の詳細である。

- ・「特に聴力が進歩したし、あと、漢字の間違えが留学前より減ったと思います。」(M)
- ・「いきなり話しかけられても、ある程度反応できるようになった」(M)
- ・「文法などはもちろん、特に発音・会話面の力を養うことができた」(M)
- ・「元がゼロだったので、驚くほど中国語が身についた」(F)
- ・「本当にゼロビギナーで行ったので、分かる言葉は確実に増えました」(F)
- ・「中国の人の言っている言葉が少しわかるようになったからです」(M)
- ・「ゼロからのスタートからしたら、中々良い方だと感じた。もっと中国語を聞き、話せる機会を自分から作っていきたいと思っている」(M)
- ・「よく小テストがあったため」(M)
- ・「はじめは授業を聞きとるのも難しく、先生の話をお聞きすることも多かったのですが、後半の授業の時期になると、速く複雑な先生の説明もだいたい聞いて分かるようになりました」(M)

次に、「まあ進歩した」と回答した16名の詳細である。

- ・「日常では、単語がある程度出てくるようになったが、文法が微妙な所が多い」(M)
- ・「正直、期待した以上の中国語の進歩は得られなかった。しかし、来る前との違いをはっきりと感じることはできた」(M)
- ・「買い物・値引き程度はできるようになった」(F)
- ・「行く以前よりは当然進歩したと思う」(F)
- ・「街とかに行ったときに、店員さんの言っていることが全然わからなかったりしたので、やっぱり聞き取りの力が思ったよりつかなかった気がします」(F)
- ・「実践的な中国語はある程度身に付いたが、文法的な中国語をもう少し身に付けたかった」(M)
- ・「先生の言っている事が初めは30%位しか理解できませんでしたが、最終的には60%前後まで理解できるようになりました」(F)
- ・「初級だったので、先生にすごく甘くしてもらったな……と正直思いました。もっと上に行けたはず」(F)
- ・「前よりも聞く力や語彙が増えた」(F)
- ・「スピーキングは期待が高すぎたせいか、期待通りにはいかなかったが、行く前と後では成長したと、日本に帰国後感じた。リスニングはすごく延びたと思う！！」(F)
- ・「以前より中国語に慣れた」(M)
- ・「限られた場合ではあるが、ある程度の基本的な知識を身につけることができた。しかし、発音は自分で納得がいくほどには、成長しなかったと思える」(M)

- ・「発音が最終的にあまり上達できなかったことが残念だった。あと听力による拼音表記が上手いかなかったこと」(F)
- ・「物凄く話せるようになったりはしないけど、全部が中国語で、とっさに中国語を使う環境というのは本当に良かったです。単語やフレーズを結構すぐ覚えれました」(F)
- ・「中国語の力は他の人と比べてまだまだだけど、最初は授業で先生の質問に答えられなかったが、授業が進んでいくにつれ、答えられるようになり、とてもうれしかった」(F)
- ・「文法事項だけでなく、中国語独特の表現やその使い方を多く学ぶことができた」(F)

Q 8. 中国語力が伸びた・伸びなかった理由は何だと思えますか？

(2010年度) まず、ポジティブな回答から見る。

- ・「中国語しか話してはいけない環境」(M)
 - ・「中国人との接する機会が多かったこと。食事の際の日本語禁止がとてもよかった」(M)
 - ・「知識がゼロだったから。それと現地で中国語をやることもモチベーションにつながって中国語のレベルアップに貢献したのだと思う」(M)
 - ・「よく買い物に行き、中国人と交流したこと」(M)
 - ・「食事中など、先生方や先輩方や友人が私に話しかけて教えて下さったからだと思えます。そして、毎日の中国人の先生による授業が本当に楽しかったからだと思えます。あとは、超市とか街の人とかと話したいと強く思える環境があったからだと思えます」(F)
 - ・「先生方のサポートのおかげです」(F)
 - ・「日本語を禁止したことにより、中国語が身についたのだと思う」(F)
 - ・「学んだことが実生活ですぐに使えるので、体に染みついたこと。本場の発音で勉強したこと」(F)
 - ・「日本語が極端に少ない環境だったから」(M)
 - ・「授業の予習復習だと思う」(F)
 - ・「毎日中国語を学習していたことと、中国人(他の国の人を含む)と会話したいという気持ちが強かったからだと思う」(M)
 - ・「岳先生が声調に気をつけて指導してくださったし、暗記することが多かったので例文をいつの間にかそのまま覚えていたから」(F)
 - ・「言おうと思ったことをすぐに書きとめて中国語におきかえるようにしていたので、生活の中での表現は特に増えたと思えます」(M)
- 続いて、ネガティブな回答。
- ・「文法を理解して身につけるには時間がかかると思った」(M)
 - ・「食事中など、先生や田中さんからの質問には答えていたけど、自分から積極的に話しかける努力が足りなかったかも」(M)
 - ・「買い物というか、ショッピング街によく行っていたから。日本語禁止を徹底できていなかったから」(F)
 - ・「やっぱり積極的に使っていかなかったのが悪かったかなと思っています」(F)

- ・「伸びたと思いますが、自分の中ではちょっと努力が足りなかった気がします」(M)
- ・「高級班に所属し、レベルがかなり高かった為に、ついて行くのがやっとだった。もう少し基礎的な文法から身に付けたかった」(M)
- ・「自分で質問したり、道を聞いたり、何とさえいいかわからないというのに直面して、落ち込んだこと」(F)
- ・「伸びなかった理由は、自分のその時の気分左右されやすい性格だったと思える」(M)
- ・「発音練習を徹底しなかったこと」(F)
- ・「行く前から少し独学してましたが、直前はテストや授業で勉強できなかったの、それができたらもっと良かったと思いました」(F)

次の回答は両面に言及がある。

- ・「のびた理由：先生の教え方が上手だったから。毎日中国語に触れたから。のびなかった理由：後半の授業の復習を怠りがちだったからです」(F)
- ・「リスニングは授業において、聞きとる、あるいは聞き取れなかった場合はジェスチャーで聞きとろうと努力したこと、そして、CDでリスニングを何回も聞き返した点で伸びたと思う。スピーキングは、行く前と後では成長したとは思いますが、リスニングほど努力をしなかった点で、伸びなやんだのではないかと思う」(F)

以上、「中国語力が伸びた」と回答した者が多かったようである。ネガティブな回答と分類したものの、記述を見るにつけ実は冷静な「ふり返り」であり、それは今後の学習に向けてポジティブな材料であると思う。

Q 9. 日本語禁止も含めて、部屋でもできるだけ中国語を使うよう心がける等、自分で中国語を身につける環境を意識的に作ろうとしましたか？

(2010年度) この項目には各人の工夫が表れている。学習面での自律へ向けた努力の様子を全文掲載する。

- ・「部屋でも日本語を話さず、TVのニュースなどを聞いて、中国語に慣れようとした」(M)
- ・「日本語禁止はとても有意義でした」(M)
- ・「教室では、先生に色々な質問をすることで、コミュニケーションをはかろうとした」(M)
- ・「中国語で日記を書こうとしたり、ということはしました」(M)
- ・「字幕付きのテレビ番組を見るように心がけた。知っている漢字を使った商品、看板を声に出してみた」(M)
- ・「はい」(M)
- ・「徹底はできませんでした。気を抜くと日本語が出てしまっていました」(F)
- ・「いつもTVをつけて、中国語を聞き取るようにしていた」(F)
- ・「なるべくテレビをつけておこうと心がけていました。友人や先輩との会話は意識してなくても、いつのまにか中国語の単語の話や文法の話になったりしていました」(F)
- ・「中国語の歌をきいたりしてました」(F)
- ・「買ったCDはかなり聴くようにしてました。テレビをもっと観ればよかったと反省してま

- す」(F)
- ・「部屋では常にテレビをつけて、少しでも中国語を聞きとれるようにしました」(M)
 - ・「部屋では中国語のテレビを観たり、CDを聴いたり、意識的に中国語を学ぼうと心がけていたが、友達には日本語で話す為、自分に甘い部分もあった」(M)
 - ・「日記をつける時できるだけ中国語を書くようにしていました」(F)
 - ・「もっとシビアになれたと思う。意識が低かった」(F)
 - ・「あまりできていなかった」(F)
 - ・「高級班・中級班同士では、サマーセミナーが始まってからは中国語でコミュニケーションをとろうとしていたが、初級班とコミュニケーションをとるとなると、どうしても日本語で会話を説明しなくては通じないために、日本語が増えてしまったかも知れない。朝の電話から夜ねるまで、中国語で会話をするよう努力したことはかわりない」(F)
 - ・「はい」(M)
 - ・「最初の頃は、意識的にそのような環境を作ろうとしたが、後半になるにつれて、そのような意識を低下させてしまった」(M)
 - ・「レベルの差のばらつきが大きかったので、日本語を時々使ってしまいました。伝わらないことへのもどかしさがありました」(F)
 - ・「作りました。お店の店員さんと話したりしました」(F)
 - ・「わからない部分は、友人に聞いたり、先生に質問して解決するようにした」(F)
 - ・「サービスに積極的に話しかけたり、バスケットをしている高校生(?)に、中国語で、バスケットの指導をしたり、バスケットだけでなく漫画や文化を通して、中国語・英語を織り交ぜて会話をしようとした」(M)
 - ・「日本語禁止に関しては、自分の中で徹底できていなかったのが一番の反省点です。どうしても中級班や初級班の人と中国語で話すときに、理解してもらえず、自分でももっと簡単な中国語や他の言い回しにすることができず、結局日本語を使ってしまうことが多々ありました」(F)
 - ・「はい。普段のセミナー生との生活以外にも、日本やその他の国にいる中国関係の友人とはチャット、電話などを中国語でやりとりするよう心がけました」(M)

Q10. 引率教員・助手・スタッフへの評価や要望を一言

教員へのコメントに心より感謝する次第である。

ここでは、教員および参加学生の誰もが認める大車輪の活躍であった助手の田中美恵子さんへの感謝のコメントを掲載して、改めて謝意を表したい。

- ・「田中さんにはいつもお姉さんのような気持ちで甘えさせてもらいました。本当に頼りになる先輩でした。」(F)
- ・「助手の田中さんは、留学について、中国語について、生活面に関して、全力でサポートしていただいたので、心地のよい生活が送れた。」(F)

Q11. 中国語の先生についての評価も聞かせてください

(2010年度) 清華大学の先生がたには、たいへん熱心にご指導して下さったことが、全般的によく書かれていた。幾つか抜粋する。

- ・「こちらの理解度をわかろうとしてくれたゲームや日常会話など授業を楽しめて学べるものに工夫されていてとてもよかった」(M)
- ・「口語の先生は分からない所があると分かるまで昼休みを裂いて私達の為に懇切丁寧に教えてくれました。何より授業がとても分かりやすかったです。聴力の先生も皆を励ましながら丁寧に教えてくれました」(F)
- ・「真剣に向きあって熱心に指導していただきました」(F)
- ・「凄くおもしろかったです！どの先生も個性的で、大好きだったので授業が好きでした。でも“日本語が喋れる”というのはあまり必須でもないかとも思いました(ゼロビギで)。でも独学していたからかも知れないです」(F)
- ・「口語の先生も、聴力の先生もすばらしく、要望にはすぐ答えてくれたし、中国語を中国語で説明する際に、簡単な単語を使用して説明してくれたり、本当に通じない場合は英語ではなくジェスチャーで説明してくれた。また、語学だけでなく、文化についてもくわしく教えてくれた点が良かった」(F)
- ・「質問をわかるまで丁寧に教えてくれたり、熱心な先生たちで良かったです」(F)
- ・「特色ある先生方で楽しく授業を受けることが出来た。特に口語の先生は生詞、背誦を通じて中国語に非常に慣れることが出来た。」(M)
- ・「非常に熱心で学生たちのことをよく考えてくれた先生方だと思いました」(M)
- ・「岳先生は本当に分かりやすく、自分の中で知識としてどんどん吸収されていくのが実感されるような授業でした。王先生は初めは少しやりにくい部分もあったのですが、私たちがこうしてほしいという要望を伝えればすぐに改善してもらえました。授業中や講座で、教科書以外で中国のことをいろいろと教えていただきました。ただ、お二人とも宿題が少なかったので、もう少し宿題があっても良かったと思います」(F)

以下、「クレーム」らしきものを2つ挙げる。

- ・「中国語が聞き取りづらい時があった」(M)
- ・「馬老師は、休み時間にはどこかへ行ってしまうのであまり話ができなくて残念だった」(M)

前者については、この1件のみであり、詳細が定かではない。言い間違えたり、聞き直したりしながら意思疎通を図るのは普通の言語運用であると報告者は思う。後者については、休み時間は休むためにあるので、酷な要求である。クレームと言うより、学生の先生に対する期待・信頼の表れと見る。

Q12. 同じ時期に滞在した他のグループと比べてどう思いましたか？

(2010年度) この設問は、新潟大学のサマセミと同時期に他大学のサマーセミナーも沢山実

施されていたことによる。

- ・「米国の人がいたけれども、ほとんど会う機会がなくて何とも言えません」(M)
- ・「北京大の早稲田や日大よりも充実していたと思います」(M)
- ・「小旅行や授業等の長年のつみかさねがあり、とてもしっかりした内容と安心さがあった」(M)
- ・「見たところでは他のグループは生活の中での中国語の使用を徹底しているところはなかったのですが、他に比べて、今回のセミナーのような環境づくりは生活の中で自分が本当に言いたいことを言うため表現を考えるときに、多くのこと一度に学ぶことができるという点で、とても有意義だったと思います」(M)
- ・「勉強の事については分かりませんが、マナーは日本の方が良いと思いました」(F)
- ・「他のグループとは交流することができなかつたので、話しかければよかったなと後悔しています」(F)

新潟大学サマセミ内部での「他のグループ(或いはクラス)」のことと判断して回答したものもあった。

- ・「高級班と中級班の差がありすぎた気がする」(M)
- ・「他のグループとあまり関われなかつたのですが、休み時間も一生懸命語学の練習をしているのを見てすごいなと感じた」(F)
- ・「見たところでは他のグループは生活の中での中国語の使用を徹底しているところはなかったのですが、他に比べて、今回のセミナーのような環境づくりは生活の中で自分が本当に言いたいことを言うため表現を考えるときに、多くのこと一度に学ぶことができるという点で、とても有意義だったと思います」(M)
- ・「(違う班と比べて、という意味に解釈しました)高級班は、授業に積極的で、発言も多く、先生方とのコミュニケーションも他の班と比べたらできていたのではないかと思う。悪い点は、高級班の中でのレベルの違いがあったと思う」(F)
- ・「レベルの差のばらつきが大きかったので、日本語を時々使ってしまいました。伝わらないことへのもどかしさがありました」(F)
- ・「中級班の授業でも良かったように感じた。王老師が昼休みに、発音の練習をしてくれていたのを後の方になって知り、できれば私自身も受けたかったと残念に思っています。聴力の授業はスクリプトも後で配ってくれると有難いと思った」(M)

なかでも、中級班と高級班のレベルの差が大きく、高級班内部にもレベルの差があったように感じられた点は、今後の検討事項と言える。

Q13. その他、書きたいことがあれば。

(2010年度)特に次の二人のコメントを掲載したい。1ヶ月セミナーを通して体得したことを踏まえ、今後どうありたいかを表明したものである。

- ・「正直な話、長期留学に対する意欲が非常に高いです。今後も中国語は独学で進めますが、やはり半年～1年は現地へ行って実践的な中国語を身に付けたいと思っています。ここで

終わらせるのは非常に勿体ないと思うので。1ヶ月間ありがとうございました。」(M)
 ・「初めて、自身が留学生となり、自分の国の言語を使用しないでコミュニケーションをすることがどれだけ大変か、どれだけ通じないか、自分の気持ちを伝えきれていないか、とてもくやしかった。また絶対行ってやる！！と思う」(F)

第3部 追跡アンケート（全11項目）

以下に、2010年12月に実施した追跡アンケートの結果を紹介する。まず、先行報告にある但し書きをほぼ踏襲することになるが、追跡アンケートを行った理由は2点ある。ひとつは、語学力の面での効果を見極めるにはある程度の時間が必要だと思われたこと。ふたつには、サマーセミナー終了時の興奮が冷めて、ある程度冷静に振り返ったときの評価を知りたかったことである。今回は3つのクラスごとの傾向も意識して考察する。

Q1. 新学期が始まって、自分に中国語力がついた実感はありますか？

1. 大いにある 2. まあ感じる 3. あまり感じない 4. ほとんど感じない

参加者からの回答について、各選択肢の合計と、各班の内訳は次の通りである。

	大いにある	まあ感じる	あまり感じない	ほとんど感じない
初 級	1	6	2	
中 級	2	5		
高 級	3	4	2	
合 計	6	15	4	0

(2010年度)「大いにある」は6名、「まあ感じる」は15名、「あまり感じない」は4名であった。25人のうち17名が肯定的な回答であった。「あまり感じない」の回答数に注目すると、初級班では2名おり、中国語の入り口のところで難しさを感じたものと思われる。一方、高級班については、レベルが「上限なし」だったこともあってか、期待していたほどの「伸び」が実感できなかったのかも知れない。

以下のQ2およびQ3の回答者の母数は21である。

(変遷) 回答数が多い順および分布の割合については、2000年度も2006年度も同様の傾向である。

Q2. (Q1で1または2と答えた人に) 次の5つの項目について、一番力がついたと思われる項目から順に1、2、3、4、5の欄に項目名を書き入れて下さい。

参加者からの回答について、各選択肢の合計と、各班の内訳は次の通りである。カッコ内は各班の内訳を表す(初級・中級・高級)。各項目の数値が6以上のものおよび、各班の数値で3以上のものに囲み線を施す。

中国サマーセミナーの成果と可能性についての一考察

	会 話	ヒアリング	発 音	読解力	作 文
1	2 (2・0・0)	8 (3・2・3)	6 (2・3・1)	4 (0・2・2)	1 (0・0・1)
2	7 (2・2・3)	4 (1・2・1)	5 (2・2・1)	2 (2・0・0)	3 (0・1・2)
3	6 (1・3・2)	6 (3・1・2)	4 (2・0・2)	4 (0・3・1)	1 (1・0・0)
4	4 (2・1・1)	2 (0・1・1)	1 (0・1・0)	7 (3・2・2)	7 (2・2・3)
5	3 (0・2・1)	1 (0・1・0)	4 (1・0・3)	4 (2・0・2)	9 (4・4・1)

(2010年度) 全体的な傾向として、表の左上と右下に数値が集中している。それは、会話、ヒアリング、発音というオーラル・コミュニケーションの面での向上が顕著であり、逆に読解力、作文といった分野が下位となっていることを意味している。

参考値として各班の内訳も掲載したことで、班と班の間の違いも考察が可能である。これらの学生の実感からは、各クラスの運営方針が浮かび上がってくるようである。例えば高級班では、もはや発音を細かく指導するよりもヒアリングや会話に重点を置いていたと考えられ、初級班ではオーラル・コミュニケーション全般に力を入れていたようである。むしろ、読解力や作文という分野まで手が回らないという現実もあるだろうが。

(変遷) 「ヒアリング」、「会話」、「発音」が上位であり、「読解力」、「作文」が下位である傾向は、2000年度、2006年度とも同様である。しかし、過去の報告においては、表の左下と右上の数値がほとんど0か1であったことを考えると、学生の感じ方が多様性を帯びてきたと言える。

Q 3. (Q 1で1または2と答えた人に) どんな時に、どのようにして実力の伸びを感じましたか? 簡単に書いて下さい。

1 : 会話、2 : ヒアリング、3 : 発音、4 : 読解力、5 : 作文

「会話」能力の向上については、中国語の先生の質問に即答できたり、留学生との交流がうまくいったり、といった場面で実感をもった学生が多かったようである。代表的な回答には次のようなものがあった。学生の主観的な実感に拠るものと、先生や留学生などから客観的に評価されて認識したものがある。

- ・「授業のときに自分の言いたいことをちゃんと伝えることが出来たときです。また先生にうまくなったといわれたとき」(高級・M)
- ・「すぐに中国語が口に出るようになった」(中級・M)

- ・「サマセミに行くまでは中国語で会話をしたことが無く全く話せなかったけど、少しは話せるようになったので」(初級・F)
- ・「今履修している中国語の授業で先生との会話練習をしたとき、スムーズとは言えないですがなんとかやれるようになった」(初級・F)

「ヒアリング」については、サマーセミナーに参加したことで耳が鍛えられ、これまでは気に留めていなかった「生活音」が「中国語」として認識できるようになったという内容の回答が目立った。主観的な実感が得られやすい分野であると言える。

- ・「新潟大学の中国語の授業で、先生が中国語で何か話す時に、サマーセミナーに行く前はよくわからなかったけど、帰ってきてからは大体分かるようになりました」(高級・F)
- ・「講義の中国語や留学生の会話が聞き取れるようになった」(高級・F)
- ・「授業のCDが少しゆっくりに感じた時」(中級・M)
- ・「声調を聞き分けられて単語の判別がよりできるようになっていたとき」(中級・M)
- ・「留学生が中国語で何について話しているのか大体分かるようになりました」(初級・F)

「発音」について、サマーセミナーに参加したことでより注意して発音するようになり、先生や留学生から褒められることで実感を得た者が多い。コメントを見るにつけ、「自分の発音を通じた」ことを特筆しなければならないという、中国語発音の壁の高さを認識せずにはいられない。

- ・「笠原先生に『発音がびっくりするぐらい良くなった』と褒められました！」(高級・F)
- ・「すらすらと文章を言えるようになった」(中級・M)
- ・「普段の授業で直されることが少なくなった」(中級・F)
- ・「留学生の友人に聞き取ってもらえたとき」(中級・F)
- ・「全然まだまだですが、授業で出てくる例文や単語の読み方やリズムがつかみやすくなった気がする」(初級・F)
- ・「声調が安定して出せるようになったことに伸びを感じます」(初級・F)

「読解力」の向上に対する実感は学生によりまちまちであるが、知らない単語があっても類推して文意をつかめるようになったというものが多かった。こういった「勘」を体得することは語学には不可欠である。

- ・「授業や中検の勉強で文章を読んだ時、また単語や文法事項を確認した際に、勉強できたのではないかと思う」(高級・F)
- ・「知らない単語が出てきても、前後の文脈でだいたいの意味が分かるようになり、文書中の文法の意味も分かるようになりました」(高級・M)
- ・「知っている単語が増えたことで教科書で辞書を使う回数が減った」(中級・M)
- ・「まだ習ったことのない単語でも前後の文から推測して読めるようになったことに伸びを感じます」(初級・F)

- ・「あまり難しいレベルまでやっていないので、伸びが分からない」（初級・F）

「作文」は、「アウトプット」という点では「会話」に似るが、書き記したものが「残る」点で、「推敲」が必要であり、文構造への理解がなければ難しい。そのためか、特に高級班で向上を実感したというコメントが多く見られた。初級・中級班では、まだ向上を実感できるところまで達していないという回答が多い中、掴みつつある趣旨の回答も見られた。

- ・「授業で短い文を作るとき、簡単な言い回しが考えなくても出てくるようになりましたし、先生が言う答え以外の表現もいくつか思いつくこともあります」（高級・F）
- ・「週に2回は書いていたので、自然と短文が書けるようになった」（高級・F）
- ・「サマーセミナーに行くまでは簡単な短文しか書くことができなかったが、セミナー中は毎日のように作文があったため、少しずつ作文力も向上した。帰国後の授業でも積極的に習ったばかりの文法や単語を作文中に書く癖がついた。」（高級・M）
- ・「例題などの文作成時に以前より流れを見て狙いを付けて作文できたとき」（中級・M）
- ・「ふと気がついたときに、簡単な文章なら書けるようになっていたことを感じました」（初級・M）
- ・「やっと、どの位置に副詞などが来るのかといったことがわかってきた気がします。あまり、はっきりとした実感はありませんが、やっと語彙が増えてきた気がしています。」（初級・M）

Q 4. 中国語力を落とさないために、特別に何かしていますか？

Q 5. さらに中国語力をつけるために何かしていますか？

この二つの設問は共通する部分が多いため、併せて回答を考察する。

参加者のほとんどの者が、中国語を使う環境に身を置く努力をしている。具体的には、中国語の授業をとる、中国語検定の勉強をする、中国人留学生と会話をする、ラジオ講座を聞く、インターネットで中国のTVを見る、などの回答があった。一方で、「何もしていない」という者は、全体で6名おり、クラスの内訳は高級1、中級1、初級4である。初級班が多いことには勉強法が分からない、というのも考えられよう。「ひと夏の思い出」と風化させないためにも、特に初級班への帰国後のフォローアップについては、初級～中級クラスの開講や学習法の指導などによる効果が今後期待される。

Q 6. 1年以上の留学に関心はありますか？その関心に、サマーセミナーに参加したことで何か変化はありましたか？

25人中「関心がある」と答えた者は21名。「関心なし」は3名。そして、「関心はあったが、サマセミに参加して、外国での生活の大変さが分かり諦めた」が1名。

以下に、「関心がある」と答えた者の回答を紹介する。参加者には交換留学が決定した者もいれば、願望と現実的な問題の葛藤に悩む者もいる。本設問は、サマーセミナーを運営する側の最大の関心事の一つであり、参加者の人生を揺さぶるプログラムであることがここで証

明されている。

- ・「もともと関心はありましたが、サマーセミナーが後押しになりました。1年の交換留学が決定しました。がんばります。」(F)
- ・「留学に関心があり、交換留学をすることが決定した。サマーセミナーに参加したことがきっかけで、自分を多角的視点から見えるように留学はするべきだと改めて実感した。」(F)
- ・「サマセミ前は留学なんて全然する気はありませんでしたが、まさか1年留学に応募するとは思ってもありませんでした。」(M)
- ・「今回のサマーセミナーに行く前は全く1年以上の留学に関心が無かったのですが、サマセミに参加したことで中国語や歴史に興味を持ち始め、来年か再来年に1年間の留学を考えています。」(M)
- ・「関心はある。サマーセミナーにいったことでその気持ちは強くなった。」(M)
- ・「今までは漠然としかなかった関心や印象が、サマーセミナーに行くことで具体的に変わった。できるできない関係なく、1年以上の留学を経験してみたいと思っています。」(F)
- ・「サマーセミナーに行くまで考えたこともなかった。しかし今では真剣に留学について考えるようになった。」(M)
- ・「サマーセミナーに行ったことで目標ができ、さらにだいたいの具合がわかったので、次につなげる大きな助けとなった。」(M)
- ・「サマーセミナーに参加して中国をその国の中で見たことで、もっと世界の色々な国を巡ってみたいと強く思いました。出来れば1年以上留学したいですが、金銭的に難しいです。」(F)
- ・「ありました。とても迷いました。サマーセミナーに行っていなかったら迷うという選択肢すら出てこなかったと思います。」(F)

Q 7. サマーセミナーに参加したことで、中国に対する関心や、語学、留学に対する姿勢など、何か変わったことがありますか？
--

Q 8. (Q 7と関連して) それはどのような変化ですか？

Q 9. (Q 7と関連して) どんなときにその変化を感じますか？

Q 7、Q 8、Q 9については、全員の回答を紹介することとする。各人毎に、Q 7、Q 8、Q 9への回答を一括して紹介する。

- ・Q 7：中国に対する関心は高まったと思う。ニュース等で中国のことが取り上げられている時など、前よりもそういった情報に敏感になったと思う。留学に対しては大きく変わっていないと思うが、語学に対してはとても刺激を受け、もっと力をつけたいと思うようになった。Q 8：Q 7の通り。Q 9：ニュースやたまたま会話の中で中国に関することが出てきた時。(高級・F)
- ・Q 7：あります。Q 8：言葉の壁がなくなり(低くなり)、中国の人が何を考えているのか分かるようになった。→自分にとって中国語を勉強してからの最も大きな変化です。言葉

- が分かるようになったことで心理的にも身近に感じられるようになりました。Q 9 : 特に胡同の老百姓に話を聞きに伺うときです。以前は通訳が必要だったのですが、現在はある程度であれば直接話ができるようになったため、彼らの話がより身近に、現実味を帯びて感じられるようになりました。(高級・M)
- ・ Q 7 : あります。Q 8 : かなり中国という国に対しての心の距離が近づきました。中国のニュースに関心を持つだけでなく、それを通じて、日本と諸外国との関係について今までよりも身近なものとしてとらえるようになりました。外国について学ぶことで、自分の母国である日本についても知らないことが多くあることにも気付きました。視野が広がったということだと思います。Q 9 : 留学生と話すときはもちろん、テレビでニュースを見たとき、そのニュースについて他の人と話すとき、民法、憲法の講義を受けているとき、などなど。いろいろなときにサマーセミナーの経験が生きていることを実感します。(高級・F)
 - ・ Q 7 : 中国語をもっと身につけたいと気持ちが強くなりました。Q 8 : いままでは中国語を話せないよりは話せたほうが今後なんらか役に立つだろうと思って勉強していましたが、サマセミに参加してからは、もっと中国人と接したい、中国関係の仕事に就きたいなど、中国語を話すのが楽しいと思いはじめました。Q 9 : 授業で中国語を使っているときや授業が楽しいと感じているときですかね。(高級・M)
 - ・ Q 7 : 大いに変化しました。Q 8 : 日本での報道と実際の中国というのは相違点が多いということを知った。Q 9 : 日本の報道で中国が叩かれている時や、中国に行ったこともない人があるかもしれない中国批判をしている時に、冷静に判断できる自分に気付いたとき。前の自分だったら、報道や批判を鵜呑みにしていただろうと思う。(高級・F)
 - ・ Q 7 : より中国という国が理解できなくなった。Q 8 : 中国への見方が複雑化した。よく言えば多角的に、悪く言えばまとまりがなくなった。Q 9 : 中国に関するニュースを耳にした時(高級・M)
 - ・ Q 7 : あった。Q 8 : テレビのニュース報道が一部の中国人しか映していないことに気がついた。同時に、自分の語学レベルが低いことと意外と積極的ではないことに気がついた。Q 9 : Q 8 に同じ。(高級・F)
 - ・ Q 7 : 特に海外に興味が広がりました。留学なんて自分の身の丈に合わないと思っていましたが、してみて、自分で地下鉄に乗って町の中を歩いてみて、より近くかつリアルに考えられるようになったと思います。Q 8 : 英語を身近に感じるようになったこと・中国の友達にメールを送るようになったこと。(と言っても月に1通程度なので。いつ途切れるか分かりませんが。) Q 9 : 中国のニュースを見て、中国のエリートだった学生たちがどのように感じるかなあと考えるとき。(高級・F)
 - ・ Q 7 : 中国に対して好き嫌いという感情は抜きにして、もっと中国に関して知ってみたいと思った。(感情的にも、国レベルの問題は色々ありますが個人的には中国は好きです) 語学に関しても興味は衰えていないのでこれからも積極的に勉強して社会に出たときに武器にできるようなレベルにしておきたい。中国自身における関心も強いので今後はゼミを通

- じて勉強を続けていきたい。Q 8 : Q 7 に同じ。Q 9 : たとえば中国に関するニュースが出たときは積極的に研究するようにしているし、テレビや新聞で中国語に接する機会があれば聞くようにしている (高級・M)
- ・ Q 7 : あります。Q 8 : 中国人に対してはいいイメージを持っていなかったが、実際に行くと日本人であってもやさしく接してくれる人が多かった。Q 9 : 日本にいる中国人に対して勉強を応援したくなる時がある。(中級・M)
 - ・ Q 7 : TVで中国に批判的 (マナー等) で報道を見ていても、「現実とは違うのにね〜」と、もっと冷静に中国に関心が持てるようになりました。Q 8 : 過熱する中国批判の中でも、以前より冷静に物事を考えるようになった。Q 9 : 反中の報道やヤフーニュースの書き込みを見ているとき。(中級・M)
 - ・ Q 7 : 英語が極めて重要な言語であること。またサマーセミナーを通して、日本では気づくことのできない中国人の暮らしぶりなどを理解できた。中国に対する見方が変わった。Q 8 : 中国人の行動などがなんとなく分かるようになった。Q 9 : 日本のニュースで中国人のマナーの悪さを指摘している時。(中級・M)
 - ・ Q 7 : 語学に関して。Q 8 : 副専攻で中国語を取ろうと思うようになった。Q 9 : 普段。(中級・F)
 - ・ Q 7 : 中国に対する関心、語学、留学に対する姿勢、全て大きく変わった。Q 8 : 特に語学について、もっと中国語が出来るようになりたいと強く感じた。Q 9 : まだ中国人留学生に中国語で話しかけてみる勇気が出ないとき。(中級・M)
 - ・ Q 7 : もっと学習してみたいと感じている。Q 8 : 前向きな好奇心。Q 9 : 授業や日常、ニュース等で中国に関する話を聞いたとき。(中級・F)
 - ・ Q 7 : 短期でも中国に滞在して中国人とふれあえたことでとても興味がわいた。Q 8 : 短気なので安心していったことで長期に渡っていける自信と安心感など経験値をためることができた。Q 9 : 留学を考えたときに以前より不安感が払拭されていたとき。遠出や旅先などへも以前より安心して自信を持っていったとき。(中級・M)
 - ・ Q 7 : 以前より、国際社会において急速に存在感を増しているという点で、中国に対して興味を持ち、講義や新聞等を通して、ある程度理解していたつもりでしたが、実際に中国に赴いて、その生の空気に触れたことで、それまで勝手に了解していた知識が誤りであることに気づき、中国を見る目が変化したということが出来ます。Q 8 : 第一点に、メディアによる中国に関する情報を、注意深く分析する必要があるということです。そして第二に、文献や映像のみではなく、実際に足を運んで、頭だけではなく体ならびに感覚を通して、その実態を客観的かつ両当事者の視点から知ることが、真の意味での「理解した」ということだと気づき、「理解した」こと、の二点です。Q 9 : 新聞の記事やインターネットでの情報に目を通す時や、留学生と話をしている時に上に挙げた変化を痛感します。(初級・M)
 - ・ Q 7 : 物凄くありました。Q 8 : 前は中国の芸能人にしか興味が無かったけど、行ってみて中国の雰囲気や文化など色んな事が凄くおもしろくてもっともっと中国に興味をわいて

- いろいろな事を知りたいと思いました。Q 9：サマセミの人と会ったり、サマセミの写真を見た時。あとのるぶで京劇を見るとまた京劇に行きたい！と思うのでその時。前は京劇に全く興味なかったです。(初級・F)
- ・ Q 7：中国についてもっと知りたいと思うようになって、前期では一切とらなかった中国関係の授業を後期でとるようになった。また、留学は自分にどう影響するのかなど、留学について具体的に考えるようになった。Q 8：履修する授業選びや中国や留学に対する考え方、異文化に触れることに、より興味がわくようになった。Q 9：授業選びや、単位に関係ない授業でも中国や異文化関係ならとってみたいと思うとき。また中国語や異文化関係は勉強していて楽しいと感じるとき。中国関係の本を読もうと思ったとき。(初級・F)
 - ・ Q 7：語学を勉強する楽しさを思い出しました。少しマンネリ気味だった英語の勉強にも再度力を入れるようになりました。Q 8：休止していた英語の勉強サークルに参加しなおし、沢山の英語の授業を聴講しました。Q 9：いやいや勉強するのではなく、目標をもって積極的に取り組むようになったので、一つ課題ができたときに喜びを感じるようになったときです。(初級・F)
 - ・ Q 7：正直な話、Q 6のように感じるのですが、留学はいけたらいいな、というぐらいの気持ちでサマセミ前後で特に変わらなかったように思います。中国に対する関心や語学の熱もサマセミから時間が経つにつれだんだん冷めてきてしまいました。変化、とは言えないかもしれませんが、サマセミのときに初日は気持ち的にきついものがありましたが、その後は基本楽しめたので、これはどこに行ってもやっていけそうだな、という実感を得ました。Q 8：Q 7に書いたとおりです。Q 9：サマセミ前もあまり暗い気分になる、ということは無かったのですが、サマセミ後はそれがさらに減ったような気がします。(初級・M)
 - ・ Q 7：サマーセミナーに参加したことで中国への関心も以前よりずっと増えましたし、歴史面、文化面、政治面での日中関係にも興味が湧きました。語学については人民大学の学生と話したことは大きな財産です。彼らに「中国語で話した方がいいか、英語で話した方がいいか」と尋ねられてどちらも出来ない自分が非常に情けなかったのと、同時に中国人でも上層部の人たちは英語を自由に操れるのだと知り、結局はまず英語を勉強しなければならないのだと思うに至りました。Q 8：Q 7の回答に同じ。Q 9：中国への関心についてニュースを見てどんな話題でも中国の話題だとチェックするようになりました。(初級・F)
 - ・ Q 7：中国語だけでなく、英語に関してもコミュニケーションツールとしてもっと活用していく、していかなければならないのだと感じた。サマーセミナーのおかげで、中国・語学に対する関心が高まったと実感している。また、いろんな人とコミュニケーションを取るべきだと感じている。Q 8：自分が今までしていたこと(考えていたこと)が狭い見分であったように感じるようになったこと。広い視野で物事をとらえられるようになったこと。Q 9：日本において外人同士で話しているのを聞いたり見たりしていると、その会話に混ざってみたいと感じたり、チューターをしている時に、もしこういう言葉を話せば

と思うときなど。(初級・M)

- ・ Q 7 : サマーセミナーで実際に北京の街に行ったことで、中国の企業をもっと知りたいと思いました。Q 8 : 中国の企業を知り、進路の一つとして考えたいというものです。Q 9 : 留学生と話している時や、新聞で中国経済の記事を読んだ時などです。(初級・F)
- ・ Q 7 : 中国語をもっと勉強してみたいと思った。Q 8 : 留学に行く前は中国に対してマイナスなイメージの方が多かったが、実際に行ってみて1か月間、過ごしていく中でむしろ好きになっていった。Q 9 : 新聞やニュースで中国に関する報道があると眼を通したり、関心を持つようになった。(初級・F)

Q10. 費用、単位など余計なものを無視して考えてみて、もう一度サマーセミナーに参加してみたいと思いますか？

25人のうち、「参加したい」と答えたのは22名。2名は他の地域へ意識が向いたようである。「別の国ならば、行ってみたいです。」「今度は、それまで以上にお金をためて、長期、海外に出てみたいと思っています。」と回答した。そして「わからない」と答えた者が1名いた。以下に「参加したい」と答えた回答を幾つか紹介する。

- ・ 思います。サマーセミナーでは語学以外にも中国に対する知識、理解を深めるためにとっても意義のある機会だと思います。(M)
- ・ 1年留学した後でもぜひ参加したいです。(F)
- ・ もちろんです！！！！社会人になってもお休みもらって行きたいくらいです！！！！(F)
- ・ 参加してみたい 語学面だけではなく、自分の視野を広げるのに役立つ(M)
- ・ 本当に参加したい。できることなら何回も参加したい。でももっと先生方の解説が分かるように基礎知識を蓄えた上で参加したい。(F)
- ・ もちろんです。来年も参加を検討しています。(F)
- ・ 金銭が関係ないのならもう一度参加してみたいです。今回は初めてのサマセミ参加で中国に対する前知識が少なすぎたと後悔する部分がありました。中国の歴史や文化をある程度分かってから行った方が今回の10倍は楽しめただろうし、語学学習にももっと興味が持てただろうと思いました。(F)
- ・ 参加したいです。また、行くとしたら中国の企業訪問を希望します。(F)

Q11. その他、何か書きたいことがあったらどうぞ！！

- ・ サマーセミナーに参加できてよかったのと、参加した直後も今も思います。語学の面でもそう思ったのですが、自分の見識が広がったという面でもすごく大きかったと思います。(F)
- ・ サマーセミナーが私に及ぼした影響は大きいです。中国語や中国の本を読んでいるのは、興味がわいたからだけでなく、サマーセミナーでの思い出がよみがえるからというものだと思います。そして、サマーセミナーによってできた人との繋がりが本当に大切に、ありがたいと思っています。先生方や友人や先輩の姿に今もお励まされています。

もっと頑張りたいと思わせてくれます。サマーセミナーにまた行けるかも、留学できるかも分からないですが、もっと中国については知りたいです。今でも中国に対していい印象だけではなく、でもただの毛嫌いではなく、その理由を考えるようになりました。他の人から見たら、自分はまだまだ全然がんばれてもいないですが、でも、本人にしかわからない程度の本当に小さなものですが、自分の中の変化を確実に感じています。この変化を大事にしていきたいです。あと、やはり現地の言葉に埋もれた生活は、本当に語学の勉強に大きく影響するなど改めて今感じています。発音やリズムもなんとなくつかめるような気がするし、語学のなんとなくな部分が養われたと思います。本当にお世話になりました。ありがとうございました。(F)

- ・1ヶ月間、本当にお世話になりました。何ヶ月たっても、サマーセミナーと一緒に参加したメンバーを見かけるといろいろ思い出してちょっと嬉しいです。検討と改善と重ねて、これからもぜひ続けて欲しいです。ありがとうございました。(F)

むすびにかえて

本稿では2010年度のアンケート結果をもとに、2000年度および2006年度に実施されたアンケート調査報告書を参照する形で考察を試みた。経年比較という観点から「変遷」という表現を用いたものの、しかしながら、ほとんどが「変わらない部分」であることを再認識する結果となった。「伝統」や「実績」が築かれていく過程を目の当たりにするようで、驚嘆するばかりである。

ただ、本年度はゼロビギナーも参加したことで、また新たな潮流が生まれているのではないかと報告者の勝手な印象として感じている。というのも、今回のアンケート票を整理する過程で、2000年や2006年時よりも、回答がばらけている印象を持ったからである。特に、冷静になってふり返った時に実施された「追跡アンケート」において顕著であり、Q10「(金銭、単位などを無視して考えて)もう一度サマーセミナーに参加してみたいか」への回答に端的に表れている。過去に実施されたアンケートにおいては、この項目は言わば「愚問」であった。全員が「参加したい」と答えていたからである。それが今回は100%ではなかった。運営サイドとしては少なからず残念に思う面もある。しかし、回答を読み返してみると、この項目は、単に「北京サマーセミナー」というプログラム自体に対する回答と言うより、「1ヵ月体験した中国」に対するそれであると捉えた方が良いように思われた。サマセミに参加して、参加学生はそれまで中国に対して抱いていた種々のイメージがクリアになって、認識を新たに帰国したことだろうと思われる。その上で「また参加したい」と答えた者が大多数存在したことは確固たる事実であるが、慎重な姿勢をとった者が数名いたことは、一見識として、中国に盲目的に入れ込むよりもよほど健全ですらあるだろう。

ふり返れば、2000年度の報告は「学生諸君の声は有り難いが、しかし時代もどうやら転換点にさしかかっているようである。この報告書はあるいは終わりの始まりを暗示していたのかも知れない。」と結ばれている。さらに、2006年度の報告の末尾には「国際センターが拾っ

たのは、火中の栗などではなく、確実な予測に立った金の卵だったことが、現実によってゆっくりと証明されて欲しいものである。」とある。それぞれの報告を起稿した「きっかけ」は異なるだろう。報告の行間からは、その時々で必死にプログラムの舵取りが行われてきたことが読み取れる。そして本稿の冒頭でも確認した通り、2000年は法学部「サマースクール」、2006年は国際センター「協賛」プログラム、そして、2010年は「清華大学・新潟大学共催」と、時宜にかなう形で実施形態を変更してきた。この3つの「サマーセミナー」は背景も実施形態も異なるものだが、詳らかに見ればコアの部分は変わることなく続いてきているのであり、それこそが17年間続いている所以ではないだろうか。

本稿執筆中に、その思いを強くしたある新聞記事を目にする機会があったので、最後にそれを紹介しておきたい。それは、「世界を舞台に活躍する人材に求められる素養とは何か」という、日本経団連が2010年9月～11月に会員企業などを対象に行った、アンケート調査の結果である^(注4)。回答の上位5項目は「既成概念にとらわれず、チャレンジ精神を持ち続けること」77%、「外国語によるコミュニケーション能力」68%、「文化・価値観の差に柔軟に対応」58%、「逆境に耐え、粘り強く取り組む」49%、「職種の専門知識」44%とのことだった。記事はこの1位の項目が2位の項目を逆転したことを伝えるものであったが、それはともかく、「サマセミ」を通じて獲得できる素養がずらりと上位を占めているのではないか、と思わず苦笑してしまった。もちろん、該当する送り出しプログラムは沢山あるだろう。しかし驚くべきは、17年前に始まったプログラムが現在でも十分に通用している点である。これはサマセミの趣旨が「送り出しプログラム」としての勘所を押さえているものであるからに他ならない。だからこそ時流に埋没せずに存続してこられたのである。

そしてその趣旨という枠組みを基盤として、プログラムに息を吹き込んできたのは、ずっと携わって来た運営サイドの熱意と、それに照応——或いはそれを凌駕する、参加学生からの変わらない支持であると言えるだろう。

(注)

^(注1) これまでの経緯の詳細は過去のアンケート報告を参照されたい。本稿は以下2篇の報告書を踏襲するものである。真水康樹著「中国サマーセミナーの成果と可能性に関する一考察 —新潟大学法学部2000年度 清華大学サマースクール アンケート調査 報告書—」(『新潟大学留学生センター紀要』第3号、2001年3月刊)、阿波村稔・真水康樹・藤田益子著「中国サマーセミナーの成果と可能性に関する一考察— 2006年度 清華大学サマーセミナーアンケート調査 報告書—」(『新潟大学国際センター紀要』第3号、2007年3月刊)

^(注2) 本稿ではアンケート集計に主眼を置いておりプログラム自体の説明は大幅に割愛している。清華大学サマーセミナーの実施状況についての詳細は、藤田益子・干野真一・櫛谷圭司・真水康樹共編『清華大学サマーセミナー報告書1994-2010 17年間の実績』を参照していただきたい。

^(注3) 2000年度の参加人数合計数は27名であったが、工学部4年生3名については「若干参加の背景がことなる」ため、対象外とする。

^(注4) 読売新聞 平成23年2月1日くらし教育19面 就活ON！